# 雲岡雑記

八木正治

蒙古大同に於いて今夏佛教展覽會、講演會が行はれ、雲岡石窟に於いて同時に大法要が行はれることゝなり、その資料などを携へて現地に着いたのは七月七日の朝で、催しは丁度その日から十日間にわたつて行はれることゝなつてゐた。

大同の街の戸毎には今度の催しに對する慶祝の裝飾が賑やかで、定期の石窟寺行のバスは現地の人々で超滿員であつた。トラックなども出したが乘りきれぬ有樣で、土地の人々にも悅ばれてゐるさまを知つた。

大同の盆地を西走し雲岡の台地に入つて、東西に連る二つの丘の間を武州川に沿つてなほも西へ行けば、丘がつきて川が曲るところに石窟寺は在る。

川の北側にある丘の裾は崖にきられて西から東へと續いてゐる。丘の高さを百五十米とすれば百米ほどの絶壁が白く風化した砂岩の面を露出してゐる。それに寄りそつて碧瓦で葺いた四層樓があり、それにつゞいた數棟の建物と、それらをとり圍んだ壁と門がある。この建物の東にも、西にも洞窟や佛龕はつゞいてゐる。

前の河原には幾十本かの楊樹が並び立ち、その下に泥造りの村家がわづかに連る。見たところ殆んどすべて黃土色の風景である。

はじめて寺門をくゞるとき、內地の大和の寺々などに較べて貧しいこゝの建築に佗しく思つたが、ながく荒廢にまかされてゐたゆゑ無理はない。

寺には先着の水野淸一、鹽田義秋の兩氏がをられた。二人は第五洞第六洞の前に建てられた四層樓の前の中庭に面した厨房につゞく部屋に泊つてゐられた。

部屋は炕と土間とからなる十二三坪の簡略なもので

あつた。部屋の南窓を明けると雲岡の村全體が見えた。家と樹と河原、明代に出來た城壁や城門の半壞の姿などが見え、川を越した對岸も見えた。向ふはやはりこちらと同じ位の高さに起伏して連る丘で、西から東へ一帶の草原となつてつゞいてゐる。所々に烽台のあとが見えるばかりである。こゝからは先年來石器や土器が採集されてゐる。この地は高原となつてをるため北京の暑熱はない。今年は雨が多くて殊に涼しく、時には寒さを覺える日さへあつた。夏春秋の雜草が同時に咲いてゐた。

×

今年の法會の期間は天候に惠まれなかつたにも係らず老幼男女は遠近より聚つた。天津、北京、張家口、厚和などからも、また大同や附近の村々からも、自動車馬車徒歩で參集した。近邑へ嫁した村の娘達やこゝの村の人達でさへもが晴衣を着飾つて洞窟に詣でた。洞窟の前の草原や河原の廣場などこれらの人々で埋められた。內地人もあつたが現地の人達が多く、その服色は雜つて美しかつた。村には天幕が張られて宿泊する人もあつた。河原に組まれた舞臺の歌舞の色彩と音曲に群衆は集められ、見世物、賭け事、飲食店、さまざまな物賣店など市日のやうに並んだ。大同と雲岡との間の競走、競馬、自轉車競技なども人氣を加へた。洞窟でも香は焚かれ鉦は鳴らされて、本尊の前に跪坐して三拜九拜する純朴な人々も多かつた。

この人出と雜踏とは大藏經の入山式と法會の祈願祭とが併せ行はれた十五日に最高潮に達した。その日は折よく晴天に惠まれて特に參詣の人々は多つた。群衆のなかを日蒙支の僧侶達は銘々の僧服をつけて經を捧げ蒙古樂に合せて山門より第六洞の前室へと進んだ。經が式壇に供へられ一しきりの奏樂と讀經があつて、日蒙支の僧侶、蒙古政府主席德王代理、大同軍部隊長、木下杢太郎氏など人々の式辭や燒香があつた、北魏五帝並びに曇曜の追悼、戰歿皇軍將兵の追悼、併せて大東亞戰勝祈願、蒙古自治邦隆昌祈願などが勤修せられた。一方中庭や二十洞の露佛前の廣場では蒙古舞樂「打鬼」が演ぜられた。黃赤綠など原色に綴られた服裝に狗や鬼の面をつけて蒙古樂に合せた素朴な踊である。寺に泊りこんだ北京放送局の人々はこれらの錄音に忙しかつた。

×

一方大同の街では華嚴寺の境内に佛教に關する寫眞や圖版を陳べて、佛教の歴史とその遺蹟を示し、同時に林彦明、塚本善隆、水野清一、木下杢太郎の諸氏の佛教に關する講演がなされて一般に少からぬ感銘を與へた。

×

今度の催物を通じてこれを顧れば、現地の人達に尠からぬ慰藉を與へたのみには止らず、佛教が過去に於いては東亞諸民族に廣く齊しく信仰されたことゝ、それによつて現在に於いてもなほ各民族はその文化に何等かの有緣な共通性を殘してゐることを、今度の展觀、講演、式典によつて人々に敎へ悟らしめたことは、たとひそれが暗々の裡に無意識に人々の心に植ゑられたとしても民族相互の融和に貢献するところは尠くあるまい。今や東亞の諸民族が單に政治的經濟的のみでなく文化的或は思想的に相結ばれねばならぬ時にあたり、而もかゝる文化工作が閑却され遲れがちの際に、この盛事をみたことを慶ぶとともに、東亞の最も南に發祥したこの宗教と藝術とが北方の民族意慾と結ばれて最も偉大な實を生のらし、東方の各民族に傳播する根原の地となつた大同雲岡の地に於いて特に催されたことに意義深いのを想つた。

×

法要が濟むと雲岡では、空ゆく雲、草食ふ家畜、うつりゆく陽ざしのほか動くものもなく、また村の子供、洞窟の山鳩、流れる水や風のほか聽ゆる音もなく淋しい日が續いた。日毎にバスが運ぶ遊覽客は一二時間の慌しい見物に歸つて行く。この靜寂の雲岡に滯つて、京都東方文化研究所が五ヶ年にわたり繼續しつゝある雲岡石窟調査の計測を手傳ひつゝ、石佛の群像のなかに起き臥し、歩き想ひつゝ月餘を過したが、こゝの彫刻の質と量とに較べればなほ足りないのを感じる。

東から西へ二粁にもわたつて斷續する丘に並んだ窟や龕は數多くゝ蜂の巣のやうに山をくり拔いてゐる。六丈にも餘る大佛から二三寸の小像に及んで數限りない多くの佛像は、はじめは殆んど同一形式の繰り返へしと思はれたが、時がたつにつれて次第にその間の差異が認められるやうになつた。初期の曇曜五窟（第十六洞より第二十洞まで）から、それに續いて造られて

顏の表情や衣紋さては窟の構造など次第に支那らしくなつて雲崗末期には龍門樣式にうつりゆく變遷のみならず、時を同くして着工されたと思はれる臺曜五窟相互間の相違、或は一つの洞窟內の群像の間に見る差異などが少しく判るやうになつた。そしてそれらが判るやうになるにつれて益々私の心を牽いたのは臺曜五窟であり、そのうちにも第二十洞、第十九洞、第十八洞である。これらはそれぞれ違つた美しさに美しい。

二十洞は前壁が崩壞して露出佛となつたが、このために觀賞は容易となつてゐる。烈しい夏の陽光を浴びた坐像は陰影がくつきりとして、その面や線の微妙な鋭さがよく浮びでて實に立派である。雲崗を通じて、この像ほど表情に性格の著しいのは比類なく、廣い額、秀でた眉目、强く筋のとほつた鼻、逞しい口から顎にかけての肉附け、長い耳など、その叡智は無礙であり、その慈悲は無量であつて、實に雄偉俊邁な尊貌である。これに對して十九洞の本尊は山のやうに重々しく、その頑丈な肉附けと搖がぬ靜坐の量感は實にもの凄い。肩から胸へ腹へと、逞ましい肉附けの盛りあがつた表面にさゝやかに美しい垂直の線條となつて下る衣紋の線は左右に廣く張つて組まれた兩脚へ水平に流れ去るほかには動きもなく、不動の剛壯さは限りなく深く遠い。

これら二像は雲崗を通じた傑作と思はれるが、華やかに明るく動きにみちた像が、靜かに暗く搖がぬ像と互に相並んだのは、造像の當時各々の作者の個性の發揮されたものか或は計劃的に構想されたものかは判らぬが、各々異る性格を示しつゝ互に相讓らぬ迫力と充實を示してゐて、藝術の高さや深さのほかに境地の廣さを感じる。

更にこれに隣して十八洞があるが、その本尊は童顏とも見える溫雅な尊容で、前の二像が各々明暗に激しい迫力を示すのに比べて、これは無心、放心にも近い素樸さに立つて、清純な穩かさのうちに深い親しみを湛へてゐる。

そして、これらの洞窟の構造も、二十洞の明るく輝いて動き、十九洞の飾寡く深く暗く沈んだのに對して、十八洞は兩脇尊が肅然と相對ひ立ち窟內の狹く愼ましい靜かさに整つてゐるなど各本尊の樣子とまことによく調和し、それらの性格を窟內に漲らすのに役立つて

ゐるやうに見える。

これらの像とその窟の完成の大きさは記念碑的であつて、東洋の歴史を通じてその比を見ないのみか、世界の各地にも稀れであらう。曇曜の五窟には曾つてこゝの村の家がつゞいてゐたが、それがために盗掘の難を免れたらしく、この點ではこゝの村人達はこゝの傑作の保存に役立つ所は少くなかつた。今これらは總べて取り拂はれて、前には廣い原が出來て、こゝからは五窟が一と目に見渡されるが、洵に壯觀である。雄大であり、嚴肅であり、靜穩である。

これらの傑出した作品に較べると、造像の年次が降るにつれて次第に人間味が加はる。その肉體にも、その表情にも寫實の面白さがまして裝飾も多くなる。しかし、それにつれ、嚴肅な高さ、靜寂な遠さ、神祕な深さを失ふ。曇曜五窟に次いで開窟されたと思はれる七八洞は過渡期を示してゐる。横門の壁面や、内室南壁にある六美人像などの構圖は動きがあつて面白い。肉附は豐滿であるがなほ嚴肅さをとゞめ、マイヨールやデスピオなどに似た生々しさを湛へてゐる。造像の技巧が自由となつて些しの不安や屈託もない。

次に五六洞から五華洞、東端西端の諸窟に及ぶに從ひ造像形式は次第に定つて、より以前に漢文化が示した思想や造型が多分に滲みこんでゐるのを見る。

かくて雲岡の造像を通じて見るときには、なほ龍門などこれにつゞくものとは明かな差異を示し、雲岡的な一つの型式と精神の特徴を持つてゐる。それは總じて明朗であり豐滿であり、ゆたかに生氣の漲つた健康な肉體に見らるゝ力と美との實感を傳へるとともに、精神的な崇高な品格をそなへてゐる。それは健全な肉體と高揚された精神との完全な調和であつて、こゝにギリシヤ彫刻と等しい完全さを示して、實に爽かである。たゞギリシヤはます〳〵その造型に寫實性を求めて理知的な發展を示したが、こゝでは觀念的、象徴的な面がより著しくなつた。この點ではゴシックのそれらとは多くの類似を持つが、雲岡のものは明るく、ゆたかに、圓ろかである。より近代的な感覺を持ち、より古典的な形式に整つてゐる。この意味で雲岡は古代エヂプト、ギリシヤのものにも、同時に近代フランスのものにも通じるところを持つ。犍陀羅藝術の源である後期ギリシヤとも關聯をもつことは勿論であるが、

何よりも近いと思はれるのはネオクラシツク當時のピカソの作品である。近代の寫實と古代の構成とを結び、單純雄勁な面の處理によつて大きな量感を表現した、健康そのものゝやうな多くの婦人像は、こゝの彫刻に著しい類似をもつ。その逞ましい野性もともに等しい。

最後にこゝの諸窟を通じて思ふことは、これらを完成した民族の計り知れぬ大きな力である。僅か三四十年の間にこの夥しい造像を仕上げた驚く可き精力と、山を次から次へと同じやうな造像によつて形を變へて了ふまで止まない執拗な根氣とには畏れを感ずるほかはない。而も大佛から小像に至るまで總べて齊しく生々と造り出されて、岩であることを疑ふばかりに爽かに、健康の喜びにあふれ明るい氣品高い微笑を浮べて生きてゐる。これは工人達の巧みな技巧はさることゝ乍ら、こゝの岩質がうまく協和して工人達がこゝの岩質を生かしたやうに、こゝの岩質が工人達を援けたところが尠くない。同時にこれはこゝの景色とも調和し、この景色を背景として始めてこれらの野性逞ましい壯大さが展開されたことを思ふのである。

いろ〳〵の觀點から眺め想ふとき、これら雲岡の諸窟の作品は限りない問題を提供して、盡きるところがない。

たゞ、この憾ばしい觀賞にあたつて、少からず妨げとなるのは自然の風化と盗掘の損傷と、後世の補修とである。風化と盗掘のあとは實に痛ましいが、補修の觀賞を損ふこともそれに劣らない。その俗惡な塗彩と成形がこゝの優秀な作品と相並んで存在することの不自然不合理なのはいふまでもないが、その被覆の下には殆んど完全な原形が美しい岩肌と形とで塗りこめられてゐることが少くなく、この場合などは殊に補修の不適當も甚だしいのを思ふ。自然の風化や盗掘による損傷はも早や如何とも復舊の方法はなくたゞ、將來の保全に意を用ふる外ないが、この俗惡な補形や塗彩だけ除去し訂正することのみによつても雲岡の觀賞はどれほど豐かに心持ちよくなることであらうと思うたことは幾度であつたことか。

こゝに來て最初にうけた印象は廢墟のいたましさであつた。そして、こゝを去るときに心にかゝるのは保存の問題であつた。希はくばこの名蹟の保護が將來益々充分に盡されんことを望んで拙稿を了る。